

優秀賞

テーマ：医療と福祉、わたしの体験
「今の私にできること」

愛知県立安城高等学校3年 竹尾 和佳菜

「一緒に闘おう？一緒に頑張ろう？」

白い服を着た人達が、ベッドに横たわる私に問いかける。当時小学5年生の私には、きれいごにしか聞こえなかった。「病気なのは私。注射を頑張るのも私。一緒に、一緒について言うけれど、あなた達は具体的に何をやるの？」。私は一生治ることのない病気から目を背け、ひねくれ者になっていた。

これが、病気であることによる孤独感を持つようになった私の入院生活での苦い思い出。

それから私は、学校で孤立してしまうのではないかと心配し、自分の病気を自分の一部にできるまでの間、病名や内容を隠していた。給食の前に保健室に行かなければならぬため、給食当番ができないことや、月に一度早退をして病院に行っていることがとても恥ずかしく、「自分は普通じゃない、みんなとは違うんだ」と自分自身に言い聞かせていた。そうしたいわけではなかったが、他にどうしたらよいか分からなかったから、言い聞かせるしかなかったのだ。

そんなある日、インターネットであるキャンプの記事を見つけた。それは私と同じ病気を持つ子ども達が親元を離れ、4泊5日のキャンプを通し、病気について楽しく学ぶというものだった。親は参加を勧めてきたが、まだ自分の病気を受け入れられずにいた私は、そのまま中学生になっていた。

中学1年生の夏、乗り気ではなかったが、親の強い押しもあって初めてキャンプに参加することにした。キャンプ施設に着くと、体育館に多くの子ども達がいた。私の発症時年齢は11歳だが、私よりもずっと前に発症している子ども達がたくさんいるということを目の当たりに

にし、少し胸が痛かった。

キャンプ1日目、人見知りの激しい私は、早く帰りたいかった。見ず知らずの人達と5日間も一緒に生活だなんて地獄としか思えなかったからだ。しかし、そんな私の気持ちでさえ変えてしまうのが、このキャンプのすごいところだと思った。

キャンプ2日目は山登り、3日目はバーベキューと流しそうめん、4日目は牧場で牛の乳搾り、キャンプファイアをした。もちろんそのなかで病気の勉強もたくさんした。食事の量や内容によって注射の量を計算したり、より良い自己コントロールができるよう血糖測定の手技を理解したり、この場でしか教わることでできない技術を学んだ。なかでもいちばん私の心にとまったことは、「できないことはない」ということ。病気だから山登りなど激しい運動はできない、病気だから好きなものを好きなだけ食べられないなんて、そんなかたい偏見は私の中で消え去った。

キャンプ5日目は、あつという間に訪れた。解散する時には、まだ帰りたくないと思えたほど、このキャンプが楽しかったんだなと感じた。

家に帰る途中、近くのサービスイリアで食事をすることにした。そこで私は楽しいキャンプは終わったんだと実感した。周りでは健常者がのうのうと食事をしているいつもの風景があった。私もいままで通りお手洗いにいき注射を打とうと思ったその時、近くの席の子が私と同じ注射を自席で打っているのを見た。まるで病気を自分の一部としてさらけ出しているかのようだった。よく見ると同じように参加していた年下の女の子だった。私はその子に後押しされるかのように自席で注射を打った。なんだか気持ちが悪くなった気がしてうれしかった。

あれから私は中学の3年間、キャンパーとしてキャンプに参加し、高校生になってからはキャンプOGとしてキャンパーを支えるボランティアスタッフの一員となり、毎年キャンプに参加している。

私のように発症原因不明のために苦しんだり、病気を受け入れられない一型糖尿病の子ども達に伝えたい。できないことはない。